

幼稚園

平成24年度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	研究の仮説	1
IV	研究の方法	2
V	研究の内容	
1	認め合う姿とは	2
2	研究保育	2
3	幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程と教師の援助	9
4	事例研究	10
VI	研究のまとめ	24
VII	今後の課題	24

研究主題

幼児同士が認め合うようになるための教師の援助を探る

I 研究主題設定の理由

幼児や幼稚園を取り巻く環境は大きく変わってきている。就労する母親の増加や、幼保一体型施設などの増加により、幼児も大人も、様々な生活形態や価値観をもつ他者と出会う機会が多くなっている。この傾向は、これからますます顕著になってくると思われる。

「幼稚園教育要領解説 平成 20 年 3 月 第 2 章 第 2 節 人とかかわりに関する領域『人間関係』〔内容〕（7）」の解説には、「友達と様々な心を動かす出来事を共有し、互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが行き交うことを通して、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切である。また、互いが認め合うことで、より生活が豊かになっていく体験を重ねることも必要である」とある。「就学前教育カリキュラム 東京都教育委員会 平成 23 年 3 月」の「乳幼児期の子供の発達に応じて確実に経験させたい内容 5 歳児 V 期」の中にも、「友達と活動する中で、互いのよさを認め合う」とある。

幼稚園において幼児は、多くの友達と出会い、友達と遊びの楽しさを分かち合い、しだいに相手を理解し、友達との関わりを深めていく。教師は、幼児が友達との関わりの中で、互いにもち味やよさを発揮し合い、共通の目的をもって遊びや生活を展開するために、幼児同士が認め合う関係を築けるよう、保育に当たることが重要であると考え。

しかしながら、私たち教師は「幼児同士が認め合う」ことについて、「その姿はどのようなものであるのか」「どのような経験を積み重ね、どのようなプロセスを経て認め合えるようになるのか」「教師がどのように援助することが大切なのか」という捉えが、十分でないと感じている。そこで、幼児同士が認め合うようになるためのプロセスや援助を明らかにしたいと考え、本研究主題を設定した。

II 研究の視点

- ・ 幼児が遊ぶ姿を分析する中で、幼児同士が認め合うようになる過程があるのではないかと考えた。その分析を基に「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」を明らかにする。
- ・ 「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」に応じた援助を行うことにより、幼児同士が認め合うようになる姿を生み出せると考え、そのために必要な教師の援助を探る。

III 研究の仮説

- ・ 「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」から、幼児の実態を把握することにより、教師が援助を行う際の判断基準とすることができる。
- ・ 幼児の姿を、「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」に基

づいて捉え、教師が意図的に援助していくことで、互いに認め合う幼児を育てることができる。

Ⅳ 研究の方法

- ・基礎研究及び事例研究、研究保育を通して、「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」を探る。
- ・研究保育、事例研究を通して、「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」に沿って、「幼児同士が認め合うようになるための教師の援助」を明らかにする。
- ・事例研究を通して、「幼児同士が認め合うようになるための教師の援助」について詳細に考察し、援助の要点を明らかにする。

Ⅴ 研究の内容

1 認め合う姿とは

本研究において、「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」及び「幼児同士が認め合うようになるための教師の援助」を探る上で、目指す幼児像について、基礎研究、事例研究を通して次のように考え、具体的な「認め合う姿」を捉えた。

- ・相手の思いやよさに気付き、思いを伝え合い、受け入れ合う幼児
 - ・友達とのつながりを深めながら、目的に向かって力を合わせる幼児
- = 認め合う姿

事例研究を重ねる中で、幼児同士が認め合うようになるためには、段階的に必要な経験を積み重ねるはずであるという考えに至り、「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」や、その過程に対応する「幼児同士が認め合うようになるための教師の援助」を導き出すために、研究保育を行うこととした。

2 研究保育

2 年保育 5 歳児 9 月下旬

(1) 幼児の実態

- ・自分の思いをはっきりと言葉で表現する幼児も多いが、相手の話を最後まで聞いたり受け止めたりすることが難しい幼児もいる。また、口調の強い幼児に圧倒されて、なかなか自分の思いを出せない幼児は教師が時間をかけてゆっくり聞くと、自分の思いを伝えようとする。
- ・学級の幼児同士のつながりが深まり、思いが通じ合う幼児もいる。教師の仲立ちがあると、話が共有されやすくなる。
- ・学級のみんなでリレーや中当てをすることを楽しんでいる。リレーは、チームに分かれて取り組む中で、チームの友達とのつながりをもち、自分のチームのメンバーを覚えたり、友達の走る様子に気付き、関心を寄せて応援したりしている。勝敗を意識する気持ちや勝ちたい気持ちが強くなってきている。

(2) ねらい

- ・友達と一緒に課題や目的をもち、繰り返し取り組んだり、頑張ったりする。

- ・自分の考えを話したり友達の話の聞いたりしながら、友達と一緒に取り組む楽しさを感じる。
- ・学級の人々と一緒に、走ったり競ったりしながら、体を動かす楽しさを味わう。

(3) 観察記録 1 (学級全体のリレーの活動) ～抜粋～

<保育 1 日目>

幼児の姿と教師の援助	分析
<相談する場面> 保育室で走る順番を相談する。相談は、数字で順番が書いてあるマグネットボードを使い、各自が自分の名前が書いてあるマグネットをもって自分たちで順番を決める。ホールへ移動してリレーを始める。 <リレーが中断する場面> 2 チームでリレーを始めるが、順番が分からなくなり、中断する。 ①教師が「あれ、おかしいね。まだ走ってない人はいませんか。」と聞くと、幼児が「7 番の人がまだ走ってない。」「まだ走ってないのにもう 2 回走っている子がいる。」と口々に気付いたことを言い、顔を見合わせる。 ②幼児が「何でだろう。」と言い、教師がバトンを渡した順番を幼児と一緒に確認していく。「ここから順番が変わっちゃったのかな。」「渡すのを間違えちゃったんだよ。」と幼児がそれぞれ話しているが、柱が陰になって、相手チームの姿が見えにくくなり、話し合いに参加していない幼児もいる。 ③教師が「どうすればよかったのでしょうか。」と聞くと、A 児が「順番にちゃんと立たなきゃいけない。5 番の人が走ってきたとき、6 番の人が先頭に来てちゃんと立っていれば、5 番の人は 6 番の友達に渡すということが分かると思う。」と話す。教師は「そうね。次に走る人が先頭にいとよいのですね。みんなが並んで待っていないといけいのですね。」と言う。 ④A 児は「バラバラだったら、アンカーに渡し忘れをすると思うから。次の番号の人が先頭に行けば、走っている人の『渡す』という気持ちが次の人の中に伝わっていくと思う。」と言い、教師が「A ちゃんが素敵なことを言っていますよ。順番に並ぶとよいのですね。」と言う。 ⑤同じチームで順番を間違えた B 児が「ありがとう A ちゃん。」と言う。	①教師が状況を問いかけたことで、幼児は自分たちで見たことを発言しながら、中断した原因を探ろうとしている。 ②教師が中断した原因を幼児と整理し、原因が分かった。 ③どうすればよいか教師が問いかけると、A 児なりに考えたことを自分の言葉で話し、伝えようとしている。教師が、話をまとめて、分かりやすく伝え、全員の気持ちが話し合いに向くようにしている。 ④教師が A 児の発言を取り上げて認め、周囲の幼児に大切なことを分かりやすく伝える。 ⑤解決してくれたことに対して、感謝の気持ちを伝えるとともに、順番に並ぶことがよいという思いをもつに至っている。
<リレーの場面> ⑥それぞれのチームで、友達の名前を呼びながら応援する。 ⑦走り終わると同じチームの友達に「どう並ぶの。」と聞いたり「こっちだよ。」と教えたりしている。	⑥自分のチームの幼児を一生懸命に応援している。 ⑦自分たちで声を掛けて知らせ合う。
<学級に戻って話し合った場面> ⑧教師が「気付いたことや良かったことを教えてね。」話すと友達が速く走っていたことや応援していたことを話す。 ⑨みんなが一生懸命走って強くなって、それで、速くなった。」「白組も赤組も力を合わせてできたことがうれしかった。」「みんなが応援していたら、うれしくなった。」と話す幼児もいる。	⑧教師の声掛けで友達の良い所に目を向けるようになった。 ⑨一生懸命走ることや力を合わせてリレーをする楽しさを感じている。

(4) 協議の内容 1

ア 幼児の実態の読み取りについて協議する

幼児の実態の読み取りについて協議する中で、幼児同士が認め合うようになるための経験について整理した。

2チームの並ぶ位置の間に柱が入ったため互いのチームの動きや一緒に走る幼児同士の姿が見えにくかったです。自分が誰と走るのか、走順とともに理解して、一緒に走る相手を見ながら走るようにすると、より相手の動きを意識できるのではないのでしょうか。

見る・まねるという視点で、幼児の実態を捉えることができます。



リレーが中断した場面で、原因が分からず、それぞれが気付いたことを発言し問題を解決していました。自分が見たことや思ったことを一生懸命伝えたり、友達の言葉をよく聞いて自分の考えを言ったりしていました。友達の話にあまり関心のない幼児も見られました。

言う・聞くという視点で捉えることができます。

伝える・受け止めるという視点でも、捉えることができます。

「みんなが一生懸命に走って頑張って、それで勝てたからうれしかった」と発言し、チーム意識が芽生えている幼児もいました。

友達の姿を認めたり、応援したりする姿も見られました。走順にあまりこだわらない幼児もありますが、チームが勝つために、どのように走順を決めたらよいか考える姿が見られ、互いの良さや力を分かっていました。

分かり合うという視点で捉えることができます。

ゼッケンを身に付ける時に、同じチームの友達を意識し、声を掛け合いながら準備していました。

協力するという視点で捉えることができます。

イ 「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」を捉える

アの協議を経て、本研究では、幼児同士が認め合うようになるための発達の姿や経験内容を「見る・まねる」「言う・聞く」「伝える・受け止める」「分かり合う」「協力する」の五つの段階（ステップ）で捉えることとし、次の表1のように表した。

なお、基礎研究及び事例研究を通じ、この過程の基盤として「一人一人の幼児の情緒の安定」、「遊びの楽しさの共有」があることを共通理解した。

表 1 幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程

段階	ステップ 1	ステップ 2	ステップ 3	ステップ 4	ステップ 5
	見る・まねる	言う・聞く	伝える・受け止める	分かり合う	協力する
幼児が経験する内容	・友達がしていることに興味をもって見る ・友達がしていることをまねる ・友達がしていることをやってみようとする ・友達と同じ言葉を一緒に言う ・友達と同じ動きを一緒にする ・友達の言動に気付く	・自分の思いを言う ・自分の考えを言う ・困ったことや嫌だと思いうことを言う ・友達の言葉を聞く ・聞いたことから情報を得る ・返事をする	・自分の思いを伝える ・自分の思いを分かってもらおうとする ・相手に分かるように話す ・友達の言いたいことが分かる ・友達の提案を聞き入れる ・友達の言動を受け止める ・自分とは異なる考えを聞き、受け止める ・友達の思いを理解して受け止める ・自分の考えと友達の考えを比べて判断する	・状況を伝え合い理解する ・思いを伝え合う ・互いの言動を受け入れ合う ・違いを受け入れられる ・相手の喜びを自分の喜びとして感じる ・相手のよさや個性が分かち合い受け入れ合う ・相談する	・共通の目的意識をもつ ・友達と力を合わせる ・友達と協力してやり遂げる ・試行錯誤しながらやり遂げる ・友達と一緒に困難なことを乗り越える ・友達がしていること、困っている事が分かち合い手伝おうとする

ウ 教師の援助について協議する

研究保育を基に、幼児が認め合うようになるための教師の援助について協議した。

認め合うための必要な援助とは何でしょうか。私たち教師が無意識に行っていることに、重要な援助があるのではないのでしょうか。

B 児は、A 児と教師の言葉を聞いて、「順番に並んだ方がいい。」と気付いたのですね。それを「ありがとう A ちゃん。」という言葉で表しています。**自分の思いや考えを表せるようにする援助**が大事なのではないのでしょうか。



幼児が分かり合うための援助として、マグネットボードが視覚的な教材として有効に働いていました。幼児全員に話が伝わって、問題が共有されるように、話し合うときは、円形になって互いの顔が見えるように環境を構成してはどうでしょうか。**次の行動を促す丁寧な援助**や環境構成が大事なのではないのでしょうか。

自分や友達が「なぜそうしたのか」幼児がじっくり考える状況をつくりたいですね。幼児の内面を捉え、**立ち止まってじっくり考えられるような援助**が大事なのではないのでしょうか。

エ 「幼児同士が認め合うようになるための教師の援助」を捉える

協議を経て、「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」の五つのステップに対応する教師の援助を

- | | |
|------|-------------------------|
| 援助 1 | 「幼児が自分の思いを表すための援助」 |
| 援助 2 | 「幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助」 |
| 援助 3 | 「幼児が次の行動に取り組むための援助」 |

の 3 段階で考えることとした。

援助 1 ～ 3 については、**表 2**のように共通理解をした。

表 2 幼児同士が認め合うようになるための教師の援助

援助 1	幼児が自分の思いを表すための援助	この研究で「幼児が思いを表す」とは、幼児が安心して、自分の思ったことを言ったり、行動したりすることとする。 そのために、教師は、幼児が思いのままに動いてみたり、関心をもった対象に働き掛けたりするなど、共感的態度で幼児の言動を受け止め、理解していく。また、幼児が自分の思いに気付けるように働き掛けたり、思いを表したくなる状況をつくったりしていく。
援助 2	幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助	この研究で「幼児が立ち止まってじっくり考える」とは、友達のしていることを見たり、状況に目を向けたりするなどして、自分の周りのことを理解し、課題や目的を見出し、深く考えることとする。 そのために、教師は、幼児がじっくりと考えるきっかけをつくり、次にどうしたいのか、どうしたらよいのかなど、幼児自身が考えられるようにしていく。
援助 3	幼児が次の行動に取り組むための援助	この研究で「幼児が次の行動に取り組む」とは、幼児が新しいことに挑戦したり、繰り返し取り組んだりするなど、意欲をもち、主体的に行動することとする。 そのために、教師は、幼児の思ったことや考えたことを実現できるよう、必要な材料や取り組むための状況などの環境を整え、幼児が自分から次の行動に取り組めるように促していく。

オ 保育の改善案

研究保育＜1日目＞における幼児の姿を五つのステップで読み取り、教師の援助について再考し、保育の改善案を次のように考えた。

幼児の姿	読み取りの視点	教師の意図	教師の援助
互いの姿が柱や隊形で見えにくかった	ステップ1 見る・まねる	相手がよく見え、意識し合えることができる状況をつくる	ゼッケンの取り方や挨拶の仕方を工夫する
友達の話を聞こうとしていなかった	ステップ2 言う・聞く	互いに顔が見え、集中して話を聞き合う状況を整える	相談するときは互いの顔が見えるように円形で座る
友達を応援し、互いのよさに気付いている幼児もいた	ステップ4 分かり合う	友達を見たり励ましたりする姿を認め、友達に関心が向くようにする	友達を応援したり良さに気付いたりする姿を認める

(5) 観察記録2（援助の改善を行った保育） ～抜粋～

表1及び表2を踏まえて(4)オで立てた三つの改善点に従い、翌日に再度、学級全体でのリレーの活動を実践した。

＜保育2日目＞

幼児は、同じチームの友達と円形になって走順について相談する。今回も名前の書いてあるマグネットを使用する。

幼児の姿・教師の援助	教師の読み取り	教師の意図
＜順番を決める場面＞ ①幼児が「ねえ、私9番でもいいかな。」と一人一人に自分の思いを話しているが、自分が走りたい順番を考えたり話したりしていて、すぐに応えない幼児もいる。 ②教師が「一人が話したら、みんなでその友達の話を聞きましょうね。」と話すと、「みんな聞いて。私9番でもいいかな。」と話し、チームの友達が「いいよ。」言う。 ③友達が勝手に自分のマグネットを置こうとすると「勝手に置かないで。」「みんなで決めるんだよ。」と話している。教師も「そうね。勝手に決めないで、みんなに伝えましょうね。みんなも友達の言っていることを聞きましょうね。」と知らせると、友達に聞かないでマグネットを置こうとした幼児が「ぼく、1番でいいかな。」と言う。 ④C児も「ぼくが1番でいいかな。」と話し、他の幼児も「私も1番がいい。1番	①幼児は自分の思いをみんなに伝え、みんなの意見を聞いてから決めようとしているが、聞こうとしない幼児がいる。 ②話し合いの仕方に気付く。 ③自分の思いを出すだけで、相手に知らせたり相手の思いを聞いたりしないで順番を決めようとしている。チームの友達は、みんなで話し合って進めていきたいという気持ちになってきている。 ④1番になりたい幼児が多く、なかなか決まらない。	①一人の話をチームのみんなで聞いて全員で話し合いながら進められるようにしたい。 ②友達の話を聞くことを思い出させ、みんなで話し合う気持ちをもてるようにする。 ③みんなで進めることを知らせる姿やみんなで進めようとする気持ちをチーム全員に浸透させていきたい。 ④それぞれの幼児が思いを十分に出してほしい。

やっていいかな。」と言い合う。 ⑤教師が「今日は全部で3回戦することにしましようね。」と言う。幼児は「じゃあ、Cくんが先に1番を走ってもらおう。」「次は違う子に決めよう。」などと考えを出し合う。 ＜リレーをする場面＞ ⑥リレーで走る順番にゼッケンをとるようにすると、同じ順番を走る幼児同士で「一緒だね。」と笑って言い合う。教師は「一緒に走るんだね。」と声を掛ける。 ⑦幼児は走る順番に整列して、教師の合図で相手チームと向き合って挨拶をし、その後、握手をする。「この前も一緒だったね。」「負けないぞ。」などと話している。 ⑧リレーが始まると、次に走る幼児に「頑張ってる。」「脚と手をいっぱい動かしてね。」と伝える。走っている友達には「頑張れ。」と応援する。教師は大きな声で応援する様子を認めたり、一緒に応援したりする。 ⑨次に走る幼児が待っている間に、バトンが受けやすいように腕を伸ばして指を開いて待っていると、隣のチームで一緒に走る幼児も同じようにして待つ。 ⑩次に走る幼児が待つときは、相手チームの友達がいないと呼んだり知らせたりして、相手チームの友達も準備ができるようにする。教師は「教えてくれてありがとう。」と知らせてくれた友達に話す。 ⑪幼児同士走り終わった友達に「早かったね。」「頑張ってたね。」などと声を掛けて次に走っている友達を応援する。	⑤見通しをもてたことで、考えを変える幼児も出てきた。 ⑥一緒に走る友達が分かり、期待している。 ⑦相手をよく見て誰と走るのかを意識し、競うことを楽しみにしている。 ⑧チームの友達を応援して勝ちたい気持ちが出てきている。 ⑨一緒に走る友達の姿を見て、よいところに気付いてまねたり、バトンの受け方を思い出したりするきっかけになっている。 ⑩走る相手が分かって、一緒に走る気持ちをもち知らせ合っている。 ⑪友達の走る様子をよく見て感じたことを伝えながら応援している。	⑤見通しをもたせ、自分たちで考えを出し合って決められるように見守ろう。 ⑥誰と走るのかが分かり、相手を意識する気持ちをもってほしい。 ⑦一緒に走る相手を意識しながらリレーに期待感をもってほしい。 ⑧チーム意識を持って応援し、友達の走り方や頑張る姿をよく見て友達の姿に気付いてほしい。 ⑨いろいろな友達と走ることで、友達のよさに気づき、自分の動きに取り入れてほしい。 ⑩互いの姿に気付いて知らせ合う姿を認め、つながりを感じながら取り組んでほしい。 ⑪友達の姿をよく見る姿を認め、互いによさに気付くようにしていきたい。
---	---	--

(6) 協議の内容 2

＜保育2日目＞における意図的な援助「ゼッケンの取り方や挨拶の仕方を工夫する」「相談するときは互いの顔が見えるように円形で座る」「友達を応援したり良さに気付いたりする姿を認める」について、次のように協議した。

幼児の思いを表すための援助はどうでしたか。



教師が問いかけたり、見通しをもたせたりしたことで、自分たちでじっくりと考えを出し合う姿につながりました。

「今日は3回戦やれますよ。」と見通しをもたせたことで、自分たちで考えられるようになりました。つまり、**結論を急がずに立ち止まって考える援助**は、とても大事だと言えます。

円形になって相談することで、それぞれの幼児が**自分の思いを話**したり、友達の話を聞いたりしやすくなりました。

相手や友達を意識する援助はどうでしたか。



握手をしたことで、相手を意識し、バトンの待ち方など友達のよい所を見てまねていました。「見る・まねる」ことが大事であることが分かりました。

友達を励ましたり認め合ったりするための援助はどうでしたか。



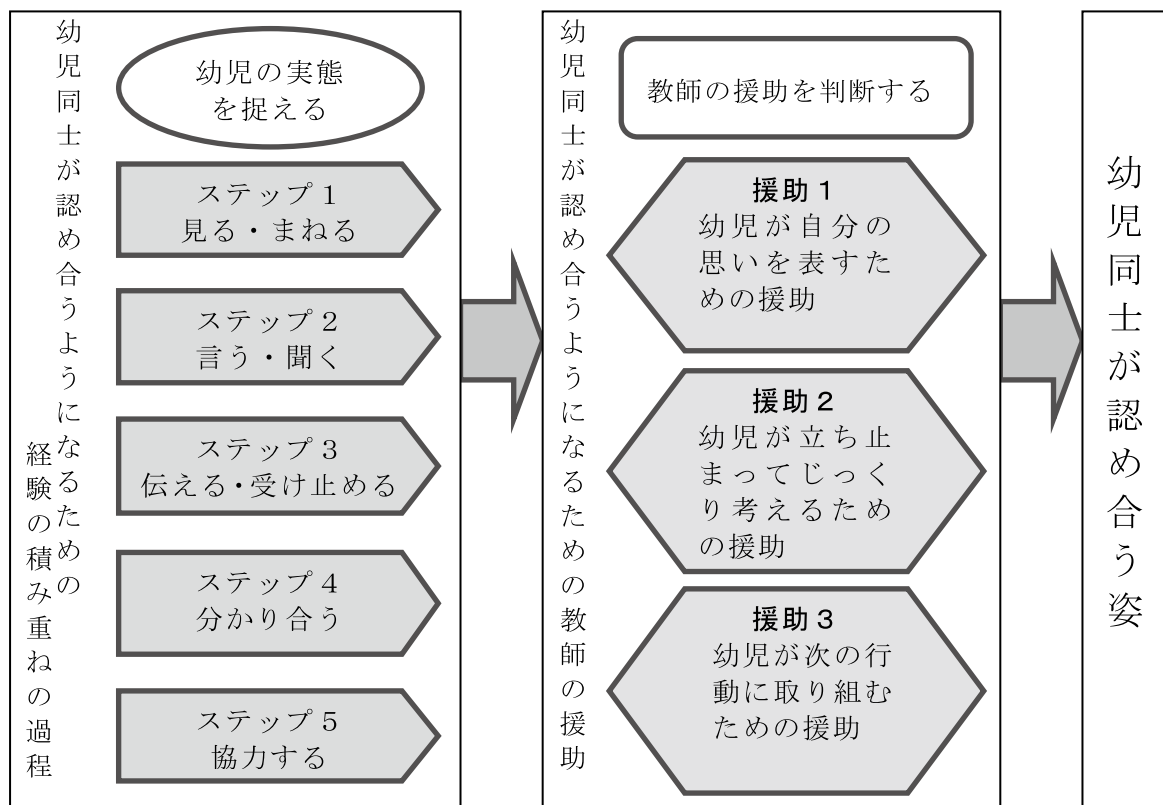
ゼッケンの取り方や挨拶の仕方を変えたら、一緒に走る友達のことをよく見たり意識したりするようになりました。準備ができていない相手の様子を見て教え合う姿も見られました。

準備ができていない友達に教えた時に教師が声を掛けたことで、教えてくれたことが互いに印象付けられていました。気付き合い、知らせ合って取り組む楽しさを感じることができました。

3 幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程と教師の援助

研究保育から、幼児の実態を「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」の五つのステップで捉え、「幼児同士が認め合うようになるための援助」を三つの視点で判断し、行っていくことで、幼児同士が認め合うようになって考えた。

図1 幼児同士が認め合うようになるためのイメージ図



4 事例研究

事例を通して、1～5のステップごとに、「幼児同士が認め合うようになるための教師の援助」1～3について詳細に考察することで、幼児同士が認め合うようになるために各ステップで大切にしたい教師の援助及び援助の要点を明らかにする。

(1) **ステップ1** 見る・まねる

「魔法のほうき、わたしもほしい」

2、3年保育 4歳児 11月初旬

ア 幼児の実態

- ・10月後半、ほとんどの幼児は友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうようになっているが、自分の興味・関心が強く、周囲の友達に目が向きにくい幼児もいる。
- ・店ごっこ、ショーごっこなどのごっこ遊びを楽しみ、身近なものになりきったり、簡単なやりとりや、遊びに必要なものに気付いて作ったりすることを繰り返し楽しんでる。

イ 教師の願い

- ・友達や教師の遊びや言動に気付き、まねしたり、取り入れたりしながら自分のやりたいことを十分に楽しんでほしい。

ウ 記録・分析

幼児の姿・教師の援助	幼児の姿の読み取り	教師の意図
① D児、E児が巧技台2台をつなげ、遊びの場を作ろうとする。「昨日、魔法とかおばけのお菓子もらったんだ。」などと話し「ここで、魔法のパーティーしようよ。」と話す。「パーティーのごちそうも作ろうよ。」「いいよ。」と言って、ままごと道具を持ってくる。 ② D児が、「そうだ魔法のほうきを作ろう。」と言って、製作コーナーの紙（A4サイズ）を丸め、先に切った紙片を付ける。「先生、ほうきができちゃった。」と見せる。教師「あら、かわいいほうき。でも、これに乗ったら小さくて落っこちてしまいますね。」と言い「もっと大きく作ってみましょうか。」と大きな紙を出し、丸めて棒を作る。「ほうきの先はどうしましょうか。」と言って、運動会で使った応援のポンポンを差す。ほうきに乗って飛ぶまねをする。「どうでしょうか。」と聞くと、D児は「いいね。」と言う。 ③ その様子を見ていたF児が「わたしも作りたい。」と言う。紙を見付け、D児のほうきを見ながら自分なりに作る。教師「すごい。Fちゃん、お友達のまねっこしたら、できましたね。」と言う。 ④ G児はそばで3人の様子を目で追っている。 ⑤ G児も、魔法になりたいと紙を探すが、すぐに紙を見付けられない。「どこかな。」とつぶやきながら、教師をとんとんと叩く。それを見ていたE児が「ここにあるよ。」と教える。教師「Eちゃんが教えてくれてよかったですね。」と伝えると、2人はにっこりする。G児は、教師に手伝ってもらいながらほうきを作る。教師は「頑張りましたね。みんなと同じです。」と認める。 ⑥ D児とE児は、魔法のほうきを持つと「ダンスをしよう」と音楽のテープを探す。	① 経験したことを友達に伝え、楽しさを味わいながら、遊びのイメージを出し合っている。 ② D児なりに魔法のほうきを作る。できたものは教師に見せたい。 ③ F児も同じものが欲しいと思う。自分なりに友達のまねをして作ることができる。 ④ G児も友達の様子を見て、同じものを欲しいと思う。 ⑤ G児は友達と同じものがほしいが、一人では思うように作れず教師を頼る。その様子を見ていたE児がG児に教える。 ⑥ 遊びのイメージを実現しようとする。	① 自分たちで遊びのイメージをもって遊ぼうとしている。見守ろう。 ② D児の思いを受け止め、イメージを実現して遊べるように材料を提示して遊びに必要なものをすぐに作れるようにしよう。 ③ 友達が作ったものをよく見たり、まねたりして作る姿を認める。 ④ G児が自分からやりたいと思って動き出すまで様子を見よう。作りたいという思いを表してきたときには受け止め、友達の物や動きを見たり、まねたりして作れるようにしよう。 ⑤ E児が教えてくれたことを認めよう。G児の戸惑う気持ちを受け止め、一緒に作りできた満足感を味わわせたい。 ⑥ 自分たちでやろうとする姿を見守る。なりきって踊れる適当な曲を提示しよう。

⑦その様子を見ていたH児は「じゃあ、ぼくはコウモリになる。」と言って、以前作ったコウモリの羽を身に付ける。 <u>教師が「コウモリってここに耳がありましたよね。」とコウモリの耳を紙で切っ</u> <u>て見せると</u> 、H児は、お面ベルトに耳を付けコウモリの動きをする。	⑦友達の刺激を受けつつ、自分のなりたいたいものになろうとしている。	⑦コウモリの姿に気付かせ耳を提示し、なりきって動けるようにする。
⑧教師が「 <u>魔女さんたちのパーティーが始まりますね。</u> 」と言って、 <u>魔女のCDをかけると</u> 、踊ったり、追い掛けたりして遊ぶ。	⑧CDを聞き音楽に合わせて体を動かしたり、イメージをもったりして楽しんでいる。	⑧音楽をかけ、イメージをもち、魔女やコウモリになりきって遊べるようにする。

エ 考察

援助1 幼児が思いを表すための援助・・・②④

○取り組みたくなるように興味・関心をもたせ、気持ちを受け止める。

- ・幼児が取り組みたくなるような材料や遊びを用意したり、楽しい雰囲気をつくったりする。さらに、幼児が関心をもったものをよく見たり、遊びのイメージをもったり、楽しさを感じ取ったりできるようにし、取り組みたい、まねしたいという気持ちを高めていく。
- ・D児の作ったミニほうきをきっかけに、大きなほうきを作って見せたりモデルになって動いたりして、幼児に自分も作りたい、まねしたいという思いをもてるようにする。

援助2 幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助・・・⑤

○取り組みたいことは何か、何がほしいのかなど、幼児の思いを確認し、イメージや目的を明らかにする。

- ・友達の姿から刺激を受け、自分の遊びに取り入れたり、まねしたりできるようによく見たり、聞いたりできるようにする。教師は、初めから必要なものを提示するのではなく、幼児が取り組みたいという思いになるまで待ち、取り組みたくなった幼児から作っていくようにする。その取り組みの様子を他の幼児が見ることで、まねしたくなる気持ちや取り組もうとする気持ちを高められるようにする。

○取り組みたいことがよく考えられるように、いろいろな素材や材料を分類整理して、見えやすく取り出しやすいように配置し、幼児が選択できるようにする。

- ・紙類をはじめ素材や材料は、色、形、大きさ、素材など、幼児が選んで用いられるように置くことで、じっくり考えながら材料が選べるようにする。
- ・幼児が互いの動きをよく見たり気付いたりして、まねたり刺激し合ったりできるように、物や棚の置き方など場や空間の構成や教師の立ち位置に留意する。

援助3 幼児が次の行動に取り組むための援助・・・①③⑥⑦⑧

○一緒に作ったり遊んだりして、楽しさを伝え、共感したり認めたりして、自分の思いを実現した満足感を味わえるようにする。

- ・必要なものを見付けたり、探したりできるように促したり、具体的な教材・材料を提示したり作り方を知らせたりして、自分の思いや遊びのイメージを実現できるように支える。
- ・G児の戸惑う姿に気付いたE児の姿を認めることで、今後も互いのしていることを見たり、関心を向けたりする姿につながっていくようにする。

○すぐに遊び出し、楽しさが味わえるように、簡単に見立てたりなりきったりして作って遊べる環境を用意する。

- ・ほうきのイメージに合う材料を用意し、簡単に作ることができるようにすることで、やってみようとする意欲を高め、すぐに友達と一緒に動きたい気持ちになれるようにする。
- ・用意する曲をリズムカルで拍子がとりやすく、イメージがもちやすい歌詞のものにしたことで、幼児がイメージを膨らませ、なりきって動いたり、踊ったりしていた。短い曲を繰り返しかけることで何回も踊ったり、友達の動きをよく見たりできるようにする。

ステップ1で大切にしたい教師の援助

幼児は、友達の遊ぶ様子を見て興味をもち、自分もやってみようとする。また、友達の楽しそうな姿に刺激を受け、同じようにやりたいと意欲をもつことが遊び出すきっかけとなる。しかし、幼児によっては、周囲の状況や友達の言動に気付かなかったり、あこがれの思いをもって見ている、どのようにまねていいか分からなかったりする。

そこで、幼児がよく見たり、まねしたりしようとしているか読み取り、幼児が友達の姿を取り入れて遊べるようにすることが認め合う幼児を育てる第一歩となる。

(2) ステップ2 言う・聞く

「ライブショーごっこ」

2年保育 4歳児 11月

ア 幼児の実態

- ・気の合う友達と一緒に遊ぶ場を作って遊び始め、自分の思いやイメージを友達や教師に動きや言葉で表わせるようになってきている。
- ・一緒に遊ぶ友達との中で自分の思いを主張し合いぶつかり合いが生じてきている。また、その中で友達が自分の思うようにはならないことを感じるようになってきている。
- ・友達の思いやイメージしていることが分かって遊ぼうとしたり、それが意に添わない時には拒否し、自分なりの動きを続けたり言葉で反論するなどの姿も見られるようになってきている。また、友達の一方的な働き掛けに戸惑いを感じたり、泣いたりして抵抗する幼児もいる。

イ 教師の願い

- ・互いの思いを言い合い、自分の思いを相手に言えた満足感を味わってほしい。
- ・自分の思いをなかなか言えなかった幼児が、遊びの中で相手に思いを言い、自分の力を出せるようになってほしい。

ウ 記録・分析

幼児の姿・教師の援助	幼児の姿の読み取り	教師の意図
①数名が「ライブを始めます。」と言いながらショーごっこを始めようとしている。	①各々の幼児がライブショーのイメージが湧き必要な物を用意している。	①自分の思いやイメージを言動に表しながら遊びを進めてほしい。

② I 児が「私マイクを持つ人ね。J ちゃんたちはこっちな。」と、J 児たちにハンドマイクを渡し、I 児はスタンドマイクを運び中央に立つ。 ③ K 児が I 児に初めて、「K もマイク持つ人やりたい。」と言う。<u>教師が「スタンドマイクの前に立つ人をやりたいのですか。」と K 児の言葉を強調しながら言う。</u> ④ 一緒に遊んでいた J 児も「L ちゃんとスタンドマイクの前に立つ人をやりたかった。」と言うと、L 児も「私も」と言う。 ⑤ すると I 児は「次の曲になったら、J ちゃん達がスタンドマイクの前に立つ人やっていいよ。」と言う。 ⑥ J 児が「I ちゃんばかりずるい。自分ばかりでまた決めてる。」と言うと、L 児も言い始める。 ⑦ <u>教師が「みんながスタンドマイクの前に立つ人をやりたいのですね。」とつぶやく。</u>I 児が「J ちゃん達が 1 曲目で I は次ね。」と答えると 2 人は納得する。I 児は「始めよう。」と CD プレーヤーのスイッチを押そうとする。 ⑧ <u>教師は、「K ちゃんもスタンドマイクの前に立つ人をやりたいのですね。さっき言ってくれたからよく分かりました。スタンドマイクに立つ人はどうして楽しいのでしょうか。」と K 児が話すきっかけを作る。</u>K 児は「こっちのマイクだといっぱい踊れるの。」と言って、以前遊びに使った自作のマラカスを二つ持ってくる。 ⑨ <u>教師は「これを使うとマラカスを持って踊ることができるのですね。K ちゃんいいこと考えましたね。」と踊り続ける。</u>I 児が「私もマラカス持って踊りたい。」と言うと、他児も次々に「やりたい。」と言い始める。 ⑩ <u>教師が「スタンドマイクがあつたらみんなでするっていいことですね。」と言う。</u>I 児が「いいこと考えた！このハンドマイクに棒を付けばいいんじゃない。」と言う。 ⑪ K 児たちはマイクを完成させ、マラカスをもちショーを再開する。教師は「K ちゃんと I ちゃんいいこと考えましたね。」と言葉を掛ける。	② I 児は自分なりのイメージがあり言葉や動きに出して伝えている。 ③ 今まで I 児に従って遊んでいた K 児が自分の思いを出しているが I 児には伝わっていない。 ④ J 児たちは I 児とは違う考えを I 児に伝えている。 ⑤ I 児が 2 人の思いを聞き、折衷案を提示している。 ⑥ J 児たちは I 児の提案を受け入れられず、反論している。 ⑦ I 児は 2 人の思いを聞き、自分の思いを譲り次の案を提示している。2 人もこの案は聞いている。 ⑧ K 児は過去の実験を今回につなげて考え、やりたいことが明確にある。 ⑨ K 児と教師の言動に刺激を受け、新たな遊びのイメージをもつ。 ⑩ I 児は、自分なりにスタンドマイクを作る方法を考え、提案している。 ⑪ 一緒に遊ぶ友達と同じものを作り、同じものをもって動くことが楽しいと感じている。	② I 児が自分なりにイメージをもち友達に伝えている姿を認め見守っていく。 ③ K 児が思いを言うことができたので、K 児の言葉が I 児に伝わるようにしたい。 ④ 思いを十分に出し合えるようにしたい。 ⑤ 相手の思いを聞いて対応しようとする姿を見守ろう。 ⑥ それぞれが思いを十分に出し合いながら、相手にも思いがあることに気付いてほしい。嫌だという思いも出せているので見守ろう。 ⑦ 友達の思いを知り、聞こうとする姿を見守る。 ⑧ 自己主張が少ない K 児が I 児たちに思いを言えるようにし、他児が思いを聞けるようにしよう。 ⑨ K 児のイメージを分かりやすく伝え、考えが生かされるようにしよう。そのことで、K 児がやりたいと思ったことを、自信をもってできるようにしたい。 ⑩ イメージが具体化し実現していくヒントになるような言葉を掛ける。 ⑪ 友達に思いを言ったり友達の考えを聞いたりしながら、遊びをつくる楽しさを味わってほしい。
--	---	--

エ 考察

援助 1 幼児が思いを表すための援助・・・③⑦⑧

○幼児の気持ちを読み取り、取り組みたい気持ちを十分に受け止めることで、幼児が教師に思いを受け止めてもらえていると感じ、話すことに安心感がもてるようにする。

・これまで遊びをリードする I 児に従って遊ぶことを楽しんでいた K 児が、自分の思いを出そうとしていた。自分の思いを強く主張しない K 児の思いは、I 児には伝わっていないため、教師は、K 児の思いを受け止め、自分の思いを表せるようにする。

○ 友達の話を聞いてみたくなるように、興味をもって聞ける状況をつくる。

- ・ 教師は、I 児が友達の思いにも目が向き話を聞こうとする気持ちがもてるように声をかけ、I 児が J 児たちの思いを聞き、部分的に受け入れて折衷案を提示しながら遊べるようにしたことで、自分の思いを主張するだけでは遊びが楽しめなくなることが分かるようにする。
- ・ 教師は、K 児が自分の思いを表わそうとしている様子を受け止め、K 児のイメージが具体化されて実現できるように後押しをしたことで、I 児だけでなく周囲の幼児も K 児の気持ちに気付けるようにする。

援助 2 幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助・・・⑨⑩

- 幼児が自分のやりたいことは何かを振り返り言葉で表すようなきっかけをつくったり、幼児のイメージや目的を実現するためのヒントを提示し、どうしたらいいか考えたりできるようにする。
- ・ 教師は、K 児が自分の思いを言いやすいように質問し、遊びへの意欲を高められるように、遊びのイメージをより具体的に表せるようにする。
 - ・ 教師との「言ったり、聞いたりする関係」を深めながら、自分の思いを言ったり友達の言うことを聞いたりするやり取りができるように見守り支える。

援助 3 幼児が次の行動に取り組むための援助・・・⑪

- 幼児が考えたことを受け止めて、考えたことに自信がもてるようにする。
- ・ K 児のイメージを教師が受け止めて実践し、周囲の幼児に楽しさを伝えていくことで、友達の考えに関心を示し受け入れてやってみようとする意欲が高まるようにする。自分が言ったことが教師や友達に聞いてもらえる喜びを味わわせ、自分の思いを言う楽しさを感じられるようにする。教師は、K 児が同じ場にいる友達と同じ物を作り持ったり動いたりしていけるように援助し、友達の思いを受け止めて遊んだら楽しくなったという思いをもてるようにする。
- 幼児がやりたいと思ったことを動きや物で表現できる環境を用意する。
- ・ マラカスやスタンドマイクなどの具体的な物を提示し、自分の思いや遊びのイメージを実現できるように支えたとともに、周りの幼児にも遊んでいることが分かるようにする。
 - ・ ハンドマイクに棒をつけてスタンドマイクを作るという幼児自身が考えたことを実際に自分で行う機会をつくり、そのための環境を整えながら、その楽しさに共感したり認めたりして、自分の思いを実現した満足感を味わえるようにする。

ステップ 2 で大切にしたい教師の援助

自分のやりたい遊びに取り組み、自分の思いを伸び伸びと表すうち、幼児は教師や友達に自分の思いを話したい意欲が高まる。自分の思いを言い、聞いてもらえることが相手に認められたうれしさや満足感につながる。しかし、幼児は、自分の思いを十分に意識していなかったり、うまく言葉で表せなかったり、相手に言えず戸惑ったりすることが多い。そこで、「言いたい」という意欲を高め、相手に自分の思いを言ったり、相手の言うことを聞いたりできるようにすることが認め合う幼児の姿につながると考える。

(3) ステップ3 伝える・受け止める

「コロコロランドを作ろう」

2年保育 5歳児 6月

ア 幼児の実態

- ・数日前に、数名の幼児が大型ブロックを横に並べて、その上に15～20cm位の大きさのボールを転がす場を作る遊びをしていた。さらに学級全体に広げて遊びが楽しめるように、教師は、グループの友達と一緒に大型遊具（積み木・はしご・巧技台など）を使ってボールを転がして遊ぶ「コロコロランドを作ろう。」と提案する。

イ 教師の願い

- ・新しいグループ（4～5人ずつ）の友達と一緒に、自分の思いを伝えたり友達の考えを受け止めたりして、友達とのつながりを感じる機会にしたい。
- ・作った物で遊ぶ面白さや、友達と考えを出し合うやり取りをしながら遊び方が広がっていく楽しさを味わってほしい。

ウ 記録・分析

幼児の姿・教師の援助	幼児の姿の読み取り	教師の意図
①M児は、グループの友達と一緒に巧技台のはしごを斜めにして組み立てる。M児はボールをはしごの上から転がすと、すぐにはしごの間から落ちてしまう。何度も転がすうちに、ボールがはしごの途中のどこに落ちるかに関心を持ち「今度はこっちに入った。」と喜ぶ。教師は、「<u>本当だ。と感心し、「こうするのね。」とやってみせると、同じグループの幼児も関心をもって見る。M児は「さっと、やってみたの。」と教師に伝える。</u> ②N児は転がしているうちに、「ここに入ったら10点ね。」と言い、次第にはしごの長い棒の部分で転がすことを思いつく。 ③教師が「<u>やらせて。」と言うと、M児は、「思い切り転がしてね。」と言う。</u> ④O児は、はしごの下からボールを登らせるように転がし始めると、M児は「上から転がすのだから下からはだめ。」と怒る。教師は「<u>下からも転がせるのですか。」とO児に聞き、試せるように促すと、下からも勢いを付けるとできることが分かる。</u> ⑤N児は、「私がこっち（側の長い棒）を転がすから、そっち（の長い棒）ならいいよ。」と言う。 ⑥N児は、自分のやり方で転がした後に「私もやってみよう。」と、O児のやり方をまねする。 ⑦このグループは「上からも下からも転がせるようにしよう。」と、遊び方を決める。教師も、「両方	①M児は転がしてみると、ボールがすぐに落ちてしまうことが分かったが、またやってみたら違う場所に入ったのでうれしくなる。次にもっと遠くまで転がしたいと思って繰り返し、勢いをつけて転がすとうまくいくことが分かり教師に伝える。 ②N児は落ちる場所に点数を付けることにしようと思いつき、なるべく遠くまで転がしてみたいと思う。 ③教師や友達も同じ動きをしてくれてうれしい。勢いよく転がすとよいことを伝えたい。 ④O児とM児で考えが異なる。 ⑤N児は場所を分けることでそれぞれのやりたいことができるように提案する。 ⑥N児はO児の考えたことを試してみたい。 ⑦O児は、自分でしてみたことを、N児もまねしてくれてうれしい。	① 幼児が勢いを付けて転がすことを考えて喜んでいる姿を認めて満足させたい。M児が試しながら思い付いた遊びを、教師が動きや言葉で表すことで、グループの仲間に伝わってほしい。 ② 互いのしていることに目が向き、一緒に作っているという気持ちをもって進められるように、一人一人の動きを情報として伝えたい。 ③ 一緒に動いてみることで、自分たちなりに考えたことが具体化されて、やりたいことが明確になるように質問しよう。 ④ O児のやりたいことを引き出して違う考えに焦点を当て、同じグループの友達が様々な考えにも目を向けられるようにする。 ⑤ 幼児たちの中でルールが作られていく過程を見守りたい。ルールが共有されていくとよい。 ⑥ まねをすることから、個々の違う考えを受け止める姿につながっていくとよい。 ⑦ 個々に考えたことを合わせてグループの遊び方として決めたことを認め、一緒に考えた喜びが味わえるようにする。考えを合わせたことを印象付けて、自分たちで決めた実感を得られるようにしたい。

から転がしていいことに決めたのね。」と確認して一緒に喜ぶ。 ⑧最後に全グループの遊び方を聞く機会をつくり、好きな場で遊べるようにすると、遊び方を聞きながら楽しむ姿が見られる。 ⑨翌日は、好きな遊びの中で、2～3人の友達と一緒に「コロコロランド作ろう。」と新たな遊具で作る幼児もいる。	⑧互いに自分とは異なる考えを受け止めている。 ⑨他のグループがしていたことを、まねしてやってみたいと思い、遊び方を伝えたり、友達が考えた遊び方を守ったり遊ぶ。様々な遊びの場の作り方や転がし方がある面白さを味わい、さらに新しいことを考えてみようと思う。	⑧遊び方を伝える中で、自分で考えたことを意識できるとよい。様々な考えを知って受け止め、自分もやってみようとする動きにつなげたい。 ⑨新しいことを考えた喜びを味わい、周りに伝えたり、受け止めたりして遊び、さらに楽しさや面白さを味わってほしい。
--	---	--

エ 考察

援助1 幼児が思いを表すための援助・・・①②③④

○自分たちで作ったり、組み合わせたりして遊べる環境を提示し、互いの思いや考えを伝え合ったことが視覚的に分かるようにする。

- ・グループで巧技台を組み合わせボールを転がして遊ぶ場を作ろうと提案し、考えを伝えたり、受け止めたりしながら遊びの場を作っていけるようにする。

○遊びの目的を意識させ、伝えたい気持ちを膨らませる。

- ・物を置きながら考えたことを表していくなど、友達に自分の思いを伝えたり、友達の思いを受け止めたりしやすい活動を精選し、自分の思いを伝えやすい内容にしていくことで、幼児の思いを表しやすくする。
- ・「コロコロランド」という名前を付け、ボールを転がす場を作ることを提示したことで、これからしようとすることのイメージや目的をもち、友達と一緒に考えていくことを明らかにし、思いを表しやすくする。
- ・N児はボールが途中で落ちた場所に点数を付けて遊びを面白くしたO児の転がし方を見て、自分もまねしてやってみたいと思った幼児の何気ない動きの中から自分なりの目当てを見付けたことに教師が共感し、もっと続けてみようと思えるようにする。
- ・始めは思うようにいかないことも、教師が幼児の動きを面白がって注目することで、幼児は試行錯誤し新たな遊びの面白さを見い出していく。

援助2 幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助・・・④⑤⑥⑦

○幼児のしたいことを聞き、思いを理解しようと寄り添う。

- ・M児にとって、自分の考えと異なるO児の意見は、O児の言葉ではなかなか伝わりにくいが、教師と一緒に動きながら示すことで、O児のやり方でもできることが分かり、受け止めることができるようにする。このグループの中で、いつも違うことを言うと思われがちだったO児に対して、何をしたいのかを受け止めようとする教師の援助により、他の幼児も目を向けて、視点を変えた物の見方をするにつなげるようにする。
- ・周りの幼児も、友達のしていることに注目したことで、友達が何をしたいと思っているかが分かり、面白そうだと感じて、自分もしてみようという気持ちになった。教師が相手の動きをまねしてみようとする。モデルとなり受け止める援助をすることが、幼児も友達の考えを受け止めるにつなげる。

援助3 幼児が次の行動に取り組むための援助・・・⑧⑨

○伝えたり受け止めたりして、仲間と協力して作ったことを印象付け、仲間意識をもつ機会をつくる。

- ・自分たちが一緒に作ってきたことが印象付くように、互いのグループが考えた遊びを伝え合う機会をつくり、相手のしていることを丁寧に見たり、何を感じたか振り返ったりできるようにして、自分たちで考えたことが受け止められたことを実感できるようにする。

ステップ3で大切にしたい教師の援助

友達に自分の思いを伝えたり、相手の言うことを聞いて受け止めたりすることで、友達の存在を受け入れ、つながりをもち次第に仲間意識が芽生えていく。しかし、思いがなかなか伝わらなかったり、聞いたり受け止めたりすることができなかったりして、戸惑ったり、いざこざが生じたりする。

伝えられた満足感を味わったり、受け止めて納得したりする関係をつくっていくことが大切である。

(4) ステップ4 分かり合う

「鉄棒名人になったよ」

2年保育 5歳児10月

ア 幼児の実態

- ・友達が固定遊具や縄跳びなどに取り組んでいる姿に影響を受け、自分も挑戦してみようとする幼児が多くなってきている。「こんなこともできる。」と言いながら、自分なりに考えた遊び方を披露して自信を付けたり、友達のしていることに関心を向けたりする姿も見られる。

イ 教師の願い

- ・それぞれのペースで、自分のできることを見つけた喜びを感じたり、友達の刺激を受けたりして、様々なことに挑んでいく気持ちを膨らませてほしい。

ウ 記録・分析

幼児の姿・教師の援助	幼児の姿の読み取り	教師の意図
① P児は、鉄棒で足抜き回りができるようになったことを喜び、教師に「見て。」と言いに来る。教師は、「うれしいね。鉄棒名人ですね。」と伝え、他にもできるようになったことをやって見せる。	① 鉄棒ができるようになったことを、教師に受け止められたことで、もっと他にもできたことを伝えたい気持ちになっている。	① 幼児の喜びを受け止めて『名人』と伝えることで、幼児の自信につながり、その気になって挑戦する気持ちを引き出したい。
② その隣でQ児も「私もできるんだよ。」と言いながら、足抜き回から手を離してぶらさがって見せる。教師は、「すごい技ですね。Pちゃんも鉄棒名人だから、二人一緒だと、ダブル名人になりますね。」と言うと、二人は顔を見合わせて笑顔になる。	② Q児もできるようになったことを認めてほしいと思い、P児のしたことに加えてよりすごい技ができることを伝えている。	② Q児もP児の影響を受けながら、自分の遊びに取り入れているので、一緒に取り組んでいることを印象付けて、楽しさが広がるとよい。
③ 教師は、二人が他にもできることを披露し始めたので、紙に書き、鉄棒の後	③ もっと他にもできたことを伝えたいと思っている。	③ これまで取り組んできたことを振り返ったり、新しく考えたりする機会をつくる。

ろにある黒板に貼る。 ④教師は、『鉄棒にぶら下がる』など、簡単に組み立てるものから『レベル1』と名付けて、やり方を絵に表して記入すると、P児は、鉄棒にお腹を付けて手を離して見せ、「これはレベル2ね。」と言う。 P児は、「Qちゃんが考えたレベルの技をやってみるね。」と言って、順を追って取り組んでいる。 ⑤Q児は、鉄棒の後、縄跳びのスイングスキップを始めて、「これも名人の紙に書いて。」と言う。教師は、『走りながら跳ぶ』『踊りながら跳ぶ』など、幼児が跳び方を考えたことを書いていくと、それを見て新たに挑戦する幼児が増えてくる。 ⑥個々にスイングスキップで跳べる回数を数え始めた。教師は、個々の記録を書けるように紙にマスを作って記入することにすると、互いの数を数えて記入するようになる。Q児は「先生、Pちゃんすごいわ。」と言う。	④自分たちで試しながら技のレベルを決めることを楽しんでいる。アイディアを出し合い、いろいろなやり方ができることが分かって、試してみたい。 ⑤他の遊具についてもいろいろな遊び方ができることに気づき、試してみたいと思う。自分の考えたことを友達が挑戦しているとうれしい。 ⑥自分の記録に挑戦することが楽しくなる。友達の頑張りも気にかけて、応援したくなる。友達の記録を自分のことのように喜ぶ。	④レベルの段階は、幼児が決めていくことで、自分たちの遊びとして楽しくなっていくとよい。アイディアを出し合う中で、遊びが充実するとよい。 ⑤他の遊具のことも書いた紙を、並べて貼ることで、選ぶことを増やし、動きを広げたい。 ⑥自分の記録に挑む気持ちを引き出し、取り組む過程を視覚化することで実感できるとよい。互いに見合う機会をつくることで、自分のことのように喜ぶきっかけをつくりたい。
---	---	---

エ 考察

援助1 幼児が思いを表すための援助・・・①②

○幼児がその気になって取り組んだり、友達の動きに影響を受けて動きを広げたりできるようにする。

- ・『名人』など、幼児が頑張っていることを実感できるような名前付けをすることで、その気になって取り組めるようにする。また、幼児が友達と二人で一緒に取り組む中で、互いの影響を受けながら遊んでいる姿に着目し、『ダブル名人』と伝えることで、一緒に頑張っていることを実感し、互いの動きに目を向けやすくなるようにする。

援助2 幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助・・・③④

○幼児の考えや動きを明らかにし、自分で決めていく楽しさを味わえるようにする

- ・これまで試みてきたことや、新しく考えたことなどを書き出すことで、自分のしてきたことが整理され、互いの動きも見えやすくなる。自分で考えたことが形に表れると、より楽しいことを考えようという気持ちにつながり、友達の決めたことにも関心が向く。幼児同士が互いのしていることが目に見えて分かるような物の提示をし、幼児同士の受け入れ合う動きを引き出していく。
- ・教師は、幼児が決めたレベルを書いた紙を鉄棒をする幼児の目に留まりやすいように黒板に貼り、それを見ながら新しいことを考えようと思う気持ちが膨らむようにする。黒板の周りには自然に幼児が集まり、自分なりに新しい遊び方を考えて思い付くきっかけになるようにする。

援助3 幼児が次の行動に取り組むための援助・・・⑤⑥

○幼児同士が、互いの取り組みを振り返り、満足感を味わう中で、次の目的をもてる

ようにする。

- ・自分の頑張りが分かるとともに、友達の頑張りに目も向けられるように、1枚の紙に跳んだ回数を示すようにする。幼児が他の遊びにも応用していく姿を取り入れ、考える楽しさや、考えたことを達成する満足感を味わえるようにし、よさや考えの違いを認めて、動きを取り入れたことで、個々の課題がみんなの課題につながり、目的をもって遊ぶ姿につながった。

ステップ4で大切にしたい教師の援助

相手に思いを伝え、聞いてもらい、本当に受け入れられたと実感できると、友達とのつながりは深まり、仲間意識が芽生える。思いや考え、遊びのイメージを出し合い、互いに受け入れて遊ぶようになるには、繰り返し遊ぶ中で、何度も言葉を交わしたり、話し合ったりすることが大切である。思いを出し合い、互いの良さや考えの違いに気づきながら、共感したり、遊びが充実したりする体験を積み重ねていくことで、仲間意識を高め、分かり合う関係を築いていくことが大切である。

(5) ステップ5 協力する

「忍者の修行を考えよう」

2年保育 5歳児11月

ア 幼児の実態

- ・運動会の体操係の取組で、自分で考えた体操を伝え合い、順につなげていくことで、振り付けが決まっていく楽しさを経験した。生活発表会の劇遊びの中でその経験が生かされ、忍者の役になった幼児同士で、修行の内容の相談をするときには、それぞれに自分のやりたいことを伝え、考えを合わせながら決めていこうとしている。

イ 教師の願い

- ・劇では、なりたい役を自分で決め、そのメンバーでグループをつくったため、日頃かかわりの少ない幼児同士が一緒になったが、新しい関係の中でも自己発揮したり、友達に思いを伝えたりできるとようになってほしい。
- ・グループの課題を受け止めて、個々の意見を伝え合い、劇の流れを考えたり調整したりしながら、力を合わせて取り組んでほしい。

ウ 記録・分析

幼児の姿・教師の援助	幼児の姿の読み取り	教師の意図
① 4人で順番に、自分が考えた忍者の修行をすることが決まる。 ② R児は、「『忍法、回転の術』にしたい。」と言い、マットの上で側転をする。S児は、「でんぐり返しの術。」と言ってR児の後から練習をする。T児は、「ジャンプの術。」と言い、フープを並べてジャンプする。U児は、「渡る術。」と言い、脚付きの棒を6個2列に並べて渡る。 ③ それぞれが考えた修行を4人で順番にすることにして、教師が用意した忍者の音楽をかけながら練習を始める。 ④ 教師が、「みんな違う修行を考えて、それをみんなで順番にすることにしたのね。」	① 運動会の時の体操を考えた経験が生きて、思い付いたことを伝え合って決めている。 ② 4人は、自分のできることを考え、伝え合い、そのことができるのかを確かめながら、個々に楽しんでいる。 ③ 自分で決めた修行を、みんながまねてくれることをうれしいと感じている。 ④ みんなで順番にするこ	① 劇の動き方について、幼児たちで考えを出し合い、合わせていけるように見守る。それぞれが考えたことに注目できるきっかけをつくりたい。 ② それぞれに考えたことをどのようにつなげて順番にするのか相談できるとよい。 ③ 忍者になりきって楽しめるよう、音楽を用意する。劇の中で使う

と確認すると、R児は、「考えた人が先頭に並ぶことにしたよ。」と言う。 ⑤ 4人は、劇の練習の中で修行を見せた後、回転扉を使って帰ると、修行に使ったマットやフープ、脚付きの棒が舞台に出たままになることに気付く。R児は、「マットを持ったら回転扉を通れないよ。」と言う。 ⑥ 教師は、「<u>マットを持って扉を開けられないですね。</u>」と言うと、S児は、「<u>マットを持って、『さらばでござる』って言うのは格好悪いよ。</u>」と言う。 ⑦ 教師は、このことを他のグループの幼児にも伝える。人魚役のグループが、「私たちが踊る場所がなくなるから片付けてほしい。」と言う。 ⑧ U児は、「フープはやめて、僕の使っている棒をジャンプにも使っていていいよ。」と言う。教師は、「<u>フープを使わないで、棒とマットになったってことですね。</u>」と確認する。 ⑨ 人魚役の幼児たちは、「<u>マットが青なら私たちの海の色と同じだから、出ていてもいいよ。</u>」と言う。教師は、「<u>他のグループの魔法使いや海賊の人たちはどう思うかな。</u>」と聞く。忍者の幼児たちが他の役の幼児たちにも聞く。海賊のグループは、「僕たちも海に出るから青いマットは出してもいいよ。」と言う。魔法使いは、「私たちは海じゃないけど・・・『青い鳥』の劇だから、青いマットがあってもいいよ。」と言う。 ⑩ 教師は、「<u>マットはいいことになったのね。では、棒とマットで、明日やってみましょう。</u>」と言うと、忍者役の4人は「やったー。」と喜ぶ。 ⑪ 翌日、4人で修行をすると、今度は他のグループに比べて時間が長くかかっていることが分かる。教師は、「<u>修行の道具は少なくなりましたね。でも、忍者の曲を今日は3回もかけたから、ポーズのところが長くかかりましたね。</u>」と伝える。 ⑫ U児は、「やっぱり、棒を持って帰るのも大変だし、時間が長いから、回転の術だけでいいよ。」と言うと、T児も「いいよ。」と言い、マットだけ使うことにする。 ⑬ R児は、S児たちにも自分のような側転をやってみるように言うが、うまくできない。 ⑭ 教師が、「<u>やろうとしてみたけど難しいのね。</u>」と言うと、R児は、「<u>じゃあ、どんなのができるの。</u>」と聞く。 ⑮ T児たちは、横に倒れて回るなど、違うことをやって見せる。R児は、「みんな違うけど、回るのは一緒だから、いろいろな回転の術ってことにしようよ。」と言う。3人は「いいね。」と答え、動き方が決まっていく。教師は、「<u>よい考えですね。みんなの考えを合わせたのね。</u>」と喜ぶと、うれしそうに練習を始める。	とが楽しい。決めた順番を守り、自分が先頭に立てることもうれしい。 ⑤ 自分たちが使ったマットは、次の登場人物が踊りをするのに邪魔になることは分かるが、持っては帰れないと思っている。 ⑥ マット運動は見せたいが、マットは片付けられないと思っている。 ⑦ 人魚が踊るためのスペースがなくなるから困ると言われる。 ⑧ 人魚が踊ることも分かり、用具を減らそうと思う。 ⑨ 周りの幼児は、マット運動がやりたいR児たちの思いが分かり、妥協案を出している。理由を付けて納得すれば、受け入れることができる。 ⑩ 自分たちの決めた修行がそのままできる事を喜んでいる。 ⑪ 二つの修行に同じ用具を使うことになり、時間がかかることが分かる。 ⑫ 自分たちの修行が時間内に終わらないことが分かり、内容を短くする相談をする。自分の提案したことを考え直している。 ⑬ R児は、自分の考えた側転を、みんなにもやってほしいがみんなはうまくできない。 ⑭ 教師の言葉を受けてT児たちの様子が分かり他のやり方を聞こうとしている。 ⑮ T児たちは、自分のできることをやって見せ、R児に受け入れられてうれしい。みんなで考えを出し合って、ようやく決まったことをうれしいと感じている。	ので、長すぎず、最後にポーズで終わるように編集して用意しよう。 ④ 自分たちで決めたことを教師が確認することで、一緒に考えたことが印象付いて、楽しさを共有できるとよい。 ⑤ 幼児が考えたことは認めながら、劇全体のことを考えると、自分たちで考えた通りに進められない事に気付いてほしい。 ⑥ 教師も、幼児が自分たちで解決できるように、マットの片付け方を幼児と一緒に考え、教師の気持ちを伝える。 ⑦ 一つの問題もみんなの問題として一緒に考えたい。 ⑧ 決まったことを整理する。 ⑨ 人魚役の幼児が、忍者役の幼児たちの気持ちを受け入れようとしているため、他の役の幼児もそれでいいのかを確かめたい。 ⑩ 実際にやってみて、解決できたことや次の課題を明らかにする。 ⑪ 用具は減ってすっきりしたが、他のグループに比べて時間がかかっていることに気付く。内容を精選したい。 ⑫ 幼児同士で決めていく姿を見守る。 ⑬ 側転は全員はできないとしたらどうするかを考えてほしい。 ⑭ R児の提案を受け入れたいが、できないことを確認することで問題明確にする。 ⑮ みんなで決めたことが印象付いて、楽しい気持ちになったり、つながりを実感できるようにする。
--	--	--

エ 考察

援助1 幼児が思いを表すための援助・・・①②③④

○幼児が考えたことを確認し、一緒に考えを合わせて進めていることを印象付ける。

- ・幼児の動きを言葉に表しながら、考えたことを明確に示していき、互いの考えた修行を順番に動きで示すことで、友達に自分の考えが分かってもらえた実感できるようにする。自分の言ったことが伝わったと実感できるようにする。

援助2 幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助・・・⑤⑥⑦⑧⑨

○思うようにならないこと、問題となっていることを整理し、話し合うことを明確に示す。

- ・幼児の考えを受け止め、問題解決の方法を探るやり取りを引き出せるように、急がずに、周りの幼児の意見も取り入れるきっかけを作るなど学級全体の問題として投げ掛けながら考えていけるようにする。

○どうすればよいか考えられるように、一緒に向き合って考える姿勢を示す。

- ・幼児の思いを受け止めながら、周りの状況や、劇全体を通しての見通しなどに気付けるように話題に上げ、考えを合わせていくやり取りのモデルを示していく。

援助3 幼児が次の行動に取り組むための援助・・・⑩⑪⑫⑬⑭⑮

○少しずつ解決に向かっていることが実感できるよう実際に動きながら、考えられるようにする。

- ・考えた事を実際に行動に移してすることで、友達の考えたことが周りの幼児にも伝わりやすくする。互いの考えたことがどのようなことなのか、具体的に分かるためには、状況が見える機会を作り、問題になっていることを明確にしていく。さらに、そのことを一緒に考えて決めていくやり取りを丁寧に引き出し、協力する気持ちを育んでいく。

○幼児同士で考えたことを実感できるようにする。

- ・一緒に考えた嬉しさが実感でき、友達と一緒に動く楽しさが感じられるように、自分たちで決めたことが印象付くような言葉掛けをする。自分の思いを十分に表せたことや、本当に受け入れられたと感じたことが積み重なるようにする。

ステップ5で大切にしたい教師の援助

同じ目的をもったり、課題を共有したりして、互いに力を合わせることで、できなかったことができるようになった、困ったことが解決できた、みんなで取り組むことで大きな目標を達成できたなど、協力して取り組んだことによる満足感や達成感を味わう経験を積み重ねていくことが大切である。

また、思いを表せる状況をつくり、自分の言ったことが相手に伝わり、受け入れられたことを実感できることが大切である。

互いの力を出し合ったり、相談したりしながら、遊びや生活を進めていき、協力することの楽しさやすばらしさを体験することが、幼児同士が認め合う姿につながる。

(6) 「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」に対応する「幼児同士が認め合うようになるための教師の援助」の要点

事例の詳細な考察から、ステップ1～5に対応する教師の援助1～3の要点について、表3のように明らかにした。このように五つのステップに合わせて、援助1～3を行うことで、幼児同士が認め合うようになっていくと考える。

表3 幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程に対応する
幼児同士が認め合うようになるための教師の援助の要点

	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5
	見る・まねる	言う・聞く	伝える・受け止める	分かり合う	協力する
援助1 幼児が自分の思いを表すための援助	・興味・関心をもたせ、気持ちを受け止める。	・話すことに安心感がもてるようにする ・聞いてみたくなる状況をつくる。	・遊びの目的を意識させ、伝えたい気持ちを膨らませる。	・その気になって取り組めるようにする。	・一緒に進めていることを印象付け、分かってもらえた、伝わったと実感できるようにする。
自分の思いに気付けるようにする					
援助2 幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助	・目的を明らかにする ・素材や材料を見やすく取り出しやすいように配置する。	・自分のやりたいことを振り返り、言葉で表すきっかけをつくる。	・幼児のしたいことを聞き、思いを理解しようと寄り添う。	・互いの取り組みを振り返り、満足感を味わう中で、次の目的をもてるようにする。	・課題や問題を整理し、話し合うことを明確にする。
状況に目が向くようにする					
援助3 幼児が次の行動に取り組むための援助	・簡単に見立てたり、なりきったりして作って遊べる環境を用意する。	・やりたいと思ったことを動きや物で表現できる環境を用意する。	・伝えたり受け止めたりして取り組んだことを印象付け、仲間意識をもつ機会をつくる。	・考えたことを達成させる満足感を味わえるようにする。	・考えたことを受け入れられたと実感できるようにする。
思いの実現に向けた環境を整える					

(7) 事例研究から導き出した具体的な教師の援助の例

事例研究を通して、「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」に対する具体的な教師の援助の例についてまとめた。（次頁参照）

表4 幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程に対応する具体的な教師の援助(例)

	ステップ1 見る・まねる	ステップ2 言う・聞く	ステップ3 伝える・受け止める	ステップ4 分かり合う	ステップ5 協力する
援助1 幼児が自分の思いを表すための援助	・楽しさに共感する。 「～しているの楽しいですね。」 「同じですね。」 「一緒にうれしいですね。」 「～みたいですね。」 ・見ていることやまねていることを言葉に表す。 「○○ですね。」	・気持ちを代弁する。 「～したかったのですね。」 「～と言っていますね。」 「～と言いたかったのですね。」 「～って聞きたかったのですね。」	・友達の思いを聞こうとしたり関心をもったりした姿を認め、聞くときの態度を印象付ける。 「最後まで聞けましたね。」 ・納得したり理解したりしたことを確認する。 「～だったのですね。」	・思いを表したことで実現できたうれしさに共感し、肯定的な受け止め方をモデルとして示す。 「面白いですね。」 「よい考えですね。」 「さすがですね。」 ・思いを伝えることの大切さに気付くようにする。 「伝えたことが分かってもらえてうれしいですね。」	・一緒に考えてできたことを喜んだり認めたりする。 「みんなで考えたのですね。」 ・自分たちがやったことや、やったことによってどうだったか、今までしてきたことを振り返り、自分の考えや思いを表せるようにする。 「やってみてどうでしたか。」
援助2 幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助	・相手が何をしているか考えさせる。 ・同じ物・欲しい物・したいことを探る。 「～しているみたいですね。」 「～を持っているのですね。」	・自分の気持ちを振り返らせ確認する。 「何て言いたかったのかしら。」 ・自分の思いを言葉にして表現できるように投げかける。 「分かってもいいですね。」	・聞いてみたくなるように興味をもって聞ける状況をつくる。 ・注目させ確認する。 「ここはどうなっているのかしら。」 「どうやったのでしょうか。」 「どうやったのか教えてください。」	・友達の考えやよさを意識させる。 「～を頑張っているのですね。」 ・状況を言葉にして、印象付ける。 「～がしたいようですね。」 「～してもらってよかったですね。」	・今までしてきたことを整理したり、周りがしていることを確認したりし何ができるか考えられるようにする。 「～までできましたね。」 ・意見を出せなかった幼児が当事者として考えられるようなきっかけをつくる。 「どう思ったのかしら。」
援助3 幼児が次の行動に取り組むための援助	・動きに言葉を添える。 ・面白さを再現する。 「～するのが楽しいですね。」 「この後も楽しそうですね。」 「もう一回やってみましょう。」 ・一緒にできるように誘う。 「～しましょう。」	言えた場合 ・考えたことに自信がもてるようにする。 「それいいですね。」 言えなかった場合 ・具体的な言い方を伝える。 「～って言うてみたらどうかしら。」 ・次回に向けての見通しを知らせ伝える機会をつくる。 「次はきつと言えますね。」	・興味をもって一緒に聞く。 ・状況や友達の思いを知って、納得したり理解したりしたことを確認する。 「～だったのですね。」 ・聞く時の態度を印象付ける。 「最後まで聞けましたね。」 ・どうすべきか、次の方法や行動を考えられるようにする。 「みんなの気持ちを聞いてどうしたいと思いましたか。」	・認め方のモデルを示す。 ・直接励ましの言葉を伝えられるようにきっかけを作る。 「友達が頑張れるようにどうするといいかしら。」 「頑張れって応援しましょう。」 ・状況を言葉にする。 「ここまでできたのですね。」 ・つぶやきを直接伝えられるきっかけをつくる。 「すてきな考えがひらめましたね。」	・取り組んだことに対して、幼児同士が認め合えるような言葉を掛け、自分たちで進められるようにする。 「よい仲間ですね。」 「よい考えがたくさんありますね。」 ・友達がしていることに気付いて認める姿をほめることで、認められることのうれしさを十分に味わえるようにする。 「友達がしたことを、いいねって気付けたことがすてきですね。」

VI 研究のまとめ

- 幼児の実態を、「見る・まねる」「言う・聞く」「伝える・受け止める」「分かり合う」「協力する」の五つのステップで捉えることで、幼児が今どの段階にいるのか、必要な経験は何かを把握することができた。「幼児同士が認め合うようになるための経験の積み重ねの過程」を教師が意識して適切に読み取り、意図的な援助を行うことが、幼児が認め合うようになるために有効であることが分かった。
- ＜見る・まねる＞は、幼児が遊び出したり、気付いたり、理解を深めたり、目的としたことができるようになったりするために必要不可欠なステップであると分かった。この経験の積み重ねが、幼児同士が認め合うようになるために重要なプロセスであるため、教師は、幼児が互いの動きを見合える場の設定や、物の配置の仕方、絵や図などの視覚的な物の提示、教師の立ち位置など、物的・人的な環境の構成を意図的に整えたり、幼児の行動を認める言葉掛けをしたりすることが、重要な援助である。
- 教師の援助を3段階に分けたことで、**援助1**「幼児が自分の思いを表すための援助」**援助3**「幼児が次の行動に取り組むための援助」は、教師が意識して行っていることが多いが、**援助2**「幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助」は教師の意識から抜けがちであることが分かった。教師が「幼児が立ち止まってじっくり考えるための援助」をすることは、幼児が友達のしていることを見たり、状況に目を向けたりするなど、自分の周りのことを理解し、深く考える態度を育んでいくことにつながる。そのためには、教師は、ヒントを与えたり、状況を整理して伝えたりすることで、幼児が次にどうしたいのか、どうしたらよいのかを考えられるようにしたりするきっかけをつくり、意欲を引き出していくことが必要である。教師は、幼児にすぐに行動を促してしまうのではなく、幼児が受け止められ理解された安心感をもってじっくり物事に取り組めるようにするとともに、遊びの目的や課題などを明らかにして幼児同士で共有できるようにしたり、違う視点に気付かせたりしていくことが大切である。
- 幼児を励ましたり認めたりする援助は、各ステップに共通して多く、教師が「認め合う」ことのモデルとなることが、幼児同士の認め合う姿につながることを確認できた。

VII 今後の課題

- 本研究では、一つのステップに焦点化して事例を検討したが、幼児の姿を一つのステップに限定して捉えることが難しい場面もあった。個々の実態、遊びの要素は多様であるため、その一つ一つを丁寧に読み取り、援助の意図を明確にしていく必要がある。
- ＜言う・聞く＞＜伝える・受け止める＞については、幼児の姿を明確に分類することが難しく、それぞれのステップで経験する内容について更に詳しく分析したり、援助を明らかにしたりする必要がある。
- 幼児同士が、伝え合い認め合う関係を築くために「言葉」は重要な役割を担うが、幼児の言葉の獲得の程度には個人差が大きく、課題が多い。更に事例検討等を重ね、教師の援助について追究していきたい。

平成24年度 教育研究員名簿

幼稚園

地区	学 校 名	職名	氏名
中央区	泰 明 幼 稚 園	教 諭	大 倉 愛 子
文京区	千 駄 木 幼 稚 園	主任教諭	木 下 えり子
北 区	じゅうじょうなかはら幼稚園	主任教諭	○篠 澤 恵 理
日野市	第 七 幼 稚 園	教 諭	森 陽 子

○ 世話人

〔担当〕 東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

指導主事 貞方 功太郎

平成24年度
教育研究員研究報告書
幼稚園

東京都教育委員会印刷物登録

平成24年度第243号

平成25年 3月

編集・発行	東京都教育庁指導部指導企画課
所在地	東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号	(03) 5320-6882
印刷会社	株式会社 イマイシ